

## 薬局におけるハイリスク薬の薬学的管理指導の現状調査

○中田 亜希子<sup>1</sup>, 赤川 圭子<sup>1</sup>, 依田 知美<sup>1</sup>, 小林 靖奈<sup>1</sup>, 蜂須 貢<sup>1</sup>, 山元 俊憲<sup>1</sup>  
(<sup>1</sup>昭和大薬)

[目的] 日本薬剤師会の「薬局におけるハイリスク薬の薬学的管理指導に関する業務ガイドライン (第1版) (第2版)」に対する認知度の把握, ガイドライン記載の業務遂行程度の把握および薬学的管理指導が難しいと考えられる薬効群の把握。

[方法] 対象はインターネット調査会社に所属する保険薬局薬剤師 147 名。上記ガイドライン (第2版) を基に質問紙を作成し, インターネット経由で回答を得た。ガイドラインに示された 11 薬効群の医薬品について, 単純集計とクロス集計による分析を行った。

[結果・考察] 上記ガイドラインの認知度は高く 89.2%の薬剤師が認知していた。認知度が高いにもかかわらず, ガイドライン記載の共通の5項目間では業務遂行程度に差がみられた。患者に対する処方内容の確認業務, 患者の服薬アドヒアランスの確認業務は他の業務に比較し, よく遂行されていた。一方, 副作用モニタリングに関する業務では, 薬効群間で業務遂行に差が認められ, 精神神経科領域では副作用モニタリングや副作用発生時の対処方法の教育が困難である様子が窺えた。効果の確認業務では, TDM 対象薬剤の検査値モニターが比較的困難となっている様子が推測された。業務遂行程度が低いと考えられる項目では, コンピュータ上での警告や服薬指導チェックシートなどの補助的な支援ツールが有用であることも示唆された。精神神経科領域において副作用モニタリング業務を妨げている要因を探ることは今後の課題のひとつと考えられる。